

観客に 心が震えるような体験を提供したい

山田さんは、かつてパフォーマーとして世界各地でダンスや演劇を中心に活動していました。現在は、さまざまなアートを組み合わせたライブ・エンターテインメントの演出を多く手掛け、世界的にも高く評価されています。

演出家 山田淳也さん



やまだ・じゅんや●昭和51年、群馬県生まれ。高校卒業後上京し、演劇集団円で演劇の基礎を学ぶ。平成10年渡米し、パフォーマンスグループ66b/cellのメンバーとしてニューヨークを中心にダンスや演劇などを披露。後に世界各地でパフォーマンス活動を行う。帰国後、ファッションショーのプロデュースを業務とする会社DRUMCANに参加し、多くのファッションショーを演出。その後独立、平成14年、David J.PRODUCTIONを設立。舞台をはじめさまざまなイベントの演出を手掛け、世界に向けて日本文化の発信に力を注ぐ。

パフォーマーから 演出家へ

——かつてご自身もパフォーマーとして舞台に立たれていたと伺いました。もともと身体で何かを表現することが好きだったのですか。

山田 母方の実家が旅館を営んでいて、小さいころから人と接する機会が多かったことが今の自分をつくりあげてきたのかなと思います。その旅館には、当時はめずらしかったカラオケのセットがあり、それを使いながらしゅっちょう好きな歌を歌っていました。

5歳ごろだったでしょうか、町内のクリスマス会でバンドの演奏をバック

に歌ったこともありました。はじめは恥ずかしがっていたのに、いざスポットライトを浴びると思い切り歌い出したことが記憶に残っています。それがとても気持ちよかったですね。とにかく目立ちたがり屋で、高校のときは文化祭の実行委員長も務めました。

——その後、どんな歩みをされたのですか。

山田 高校の3年間はずっとラグビーをやっていました。大学に入っても続けようと思っていましたが、腰を痛めてしまい、その思いはかないませんでした。でも東京に行きたいという気持ちで強く、都内の製菓専門学校に入学しました。昼は学校に通って勉強しながら、夜はいろいろな場所に出入っていました。とにかく東京の夜はとても面白く、私はその虜になってしまいました。

そんな中で芸能関係の人たちと知り合い、「俳優になりたい」と考えるようになったのです。そして俳優の基礎を学ぶために劇団に入りました。でも次第に「果たして俳優が自分の進むべき道だろうか」という思いが強くなり、世界に目を向けて仕事をするにはできないだろうか考えるようになったのです。そんなとき、たまたま声をかけてくださった方がいてニューヨークに渡りました。

——ニューヨークはさまざまなア

ティストが集い、刺激し合うところでですね。

山田 音楽、映像、写真などジャンルを問わず、多くのアーティストと出会いました。とにかく吸収するものがたくさんありましたね。彼らがアートについて真剣に議論したり、作品づくりのために活動している姿を見るにつけ、大きな刺激を受けました。そしてそれが自分の血や肉となっていくことを確かめるという日々でした。

一方、パフォーマンスグループのメンバーとしてパーティなどでダンスを披露し、大きなイベントにも参加しました。やがてニューヨークだけでなく、世界のあちこちで自分たちのパフォーマンスを披露するようになりました。

20代前半はこんなふうに、世界中を旅しながらそこで出会ったことをインプットし、それを自分の中で消化してエンターテインメントとしてアウトプットする……つまりステージでパフォーマンスを披露するという経験を積みました。

——やがて日本に戻ってこられたわけですね。

山田 日本に戻ってきたものの、どのようにして生活していこうかと悩んでいたときに、縁があつて飛び込んだのがファッションショーの企画やイベントをする会社でした。当時、ファッション業界はとても華やかな世界でした。パ

「infinity」の舞台。さまざまな日本の伝統芸能を登場させて、独自の演出で日本文化を世界にアピールする。



山田さんが総合プロデューサーを務め、「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」で上演された「THE SAKE」の舞台。舞台は最高評価の星5つを獲得した。

リコレにも連れて行ってもらい、目を見張るような体験をしました。しばらくしてこの業界での私のステータスも確かなものになっていったと思います。ただ一方で、もともと演劇をやっていたせいか、ファッションショーを手掛けるだけではあきたらなくなりました。東京ガールズコレクションのメインディレクターを務めたのはそんなときでした。

これを契機にさまざまな要素がからみ合う複合的なライブ・エンターテインメントの演出やプロデュースも手掛けるようになりました。新たに自分が目指すものが見えてきたと感じましたね。演出家としてのスキルが上がったということも実感しました。そんな思いの中で、きやりーばみゅばみゅやAKB 48などのライブの演出を担当したわけです。

**お客様にご満足いただけるよう
あらん限りの力を尽くす**

——演出やプロデュースと一言でいってもその内容はたいへん幅が広いですね。その中で、最も心がけていらっしゃるのどのようなことでしょうか。

山田 お客様は日常では味わうことができないような時間を過ごしたいという思いで、お金を払ってステージを見て来てくださる。私はその思いに応え、来てくださった方に、心が震えるよう

な体験をしていただけるステージにしなければならぬと考えています。そのため、自分の持てる力をあらん限り注ぎ込んで、一つの作品をつくり上げるのです。作品をつくるときは、いつもお客様目線に徹することを心掛けているといえるでしょうね。

ほかの演出家がどうこうというより、自分はどういう作品をつくり上げたいのかが大切だと考えています。つまり敵は外ではなく、自分の中にあるんだということ意識しているのです。それが「演出家・山田淳也」の評価にもつながってくると思っています。

また作品づくりには多くの人が関わります。それぞれが気持ちよく仕事をするためには何が必要か、いつも気にかけていますし、いいステージをつくるためには彼らと十分にコミュニケーションをとることも大切です。作品づくりに関わる人たちの思いが、ちょっとしたでもずれてしまったら、思うような作品はできません。

——世界最大級の演劇祭といわれる「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」への参加など、日本を世界に向けて発信することにも「熱心ですよ」。

山田 独立したときから自分のワールドは世界だと考えていました。そうではなくて面白くありません。「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」では「THE SAKE」という日本酒をテーマとした作品で参加し、高い評価をい

ただきました。

私は伝承されるべき日本の伝統文化、光景、産業、観光などをエンターテインメントにして、海外に橋渡ししたいと考えています。「THE SAKE」の公演を終えた後、さらに日本を凝縮して伝えたいという思いが強くなり、歌舞伎や狂言、和太鼓、日本舞踊、民謡、津軽三味線、尺八など日本文化の最も華やかな要素を盛り込んだ「infinity」というステージをつくりました。

——近ごろの若い人たちは、何が好きなのか、どんな仕事をやりたいのか、自分でもわからないという声をよく聞きます。彼らへのアドバイスをいただけますか。

山田 とにかく外に出て、どんなことでもかまわないからトライしてみることが大切ではないでしょうか。そうした行動がそれまでの殻を破り、自分を変えらるることにつながっていきます。ときには挫折もするでしょう。そうして何かを体験し、人との関係を築いていく。

スマホ一つでどんな情報でも簡単に手に入る現代では、自分で実際に体験するということが少なくなっています。これは決して望ましい状況ではありません。実際に何かを体験してこそ、自分のものになる。その積み重ねが自分をつくり上げていくのではないのでしょうか。そうして自分が本当にやりたいことが見つかるのだと思います。